

漢文訓読語に於ける係助詞に就いて

築島, 裕
東京大学助教授

<https://doi.org/10.15017/12333>

出版情報 : 語文研究. 10, pp.27-46, 1960-05-30. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

漢文訓読語に於ける係助詞に就いて

築 島 裕

春日政治先生が御めでたく八十の齡を重ねられましたことを心からお慶び申し上げます。この拙い一篇を捧げ、御学恩の万分の一に報い奉りたく存じます。今後益々御健康にて末長く我々後学をお導き下さるやう、切に祈上げます。

平安時代に於て、当時の漢文訓読に用ゐられた言葉が、同じ時代の和歌や和文等に用ゐられた言葉に比べて、多くの相違点を持つてゐたことは、国語史上極めて重要な事柄であり、殊に文法史・語彙史・文体史等を考へる際には、その構想の基に据へべき基本事項である。この事柄に関し、春日政治博士以来、若干の研究者によつて研究が進められ、その結果、多くの点が明かにされるに至つた。しかし尚解明せられずに残されてゐる問題も極めて多い。殊に、文の構造に関する事項は、多くの部分が未検討のままに残されてゐるやうである。この点について、研究を着実に進める為には、古訓点本から、その摘録でなく、全文を解読して、精密な訓下し文を作成することが必要であらう。既に春日博士の名著「西沢金光明最勝王経古点の国語学的研究」を始めとし、大坪併治氏・中田祝夫博士等によ

つて、古点本の全文の解読文も相当数が公にされてゐる。私は、これら諸先学の御著作に、私が接し得た若干の資料を加へ、大体、平安初期から院政時代に亘る訓点資料を中心として、当時の漢文訓読語に於ける文の構造を検討し、同じ平安時代の和歌和文の文の構造と比較することによつて、その特質を解明して行きたいと考へるのであるが、本稿はその試みの一つとして、訓読語文に於ける係助詞の機能について、一二気附いたことを述べて見たいと思ふ。資料の取上げ方についても、論の構成についても、未熟な点が多いのであつて、今後の補正を期したいと思ふのである。大方の御高批を切に願上げる次第である。

係助詞に属する語として、本稿では、「は」「も」「ぞ」「なむ」「や」「か」「こそ」の七語だけを認めることにする。又、これら各語について、用法によつては終助詞に含められる場合もあるが、本稿では、終助詞的な働きをするものまで、すべて含めて論ずることとする。

国語文一般として考へた場合、係助詞が文の構造上殊に重要な役

割を担つてゐることは周知の事実であるが、そのことは平安時代の国語文に於ても通用することである。唯その用法の面で少し詳しく見ると、同じ平安時代に於ても、漢文訓読語の係助詞と、和歌和文の類の係助詞との間には、相当に大きな隔りがある。このことは、係助詞に関する文の構造が、訓読語文に於て、特徴的な点が多いといふことにもなるやうである。

訓読の係助詞に関して、概略、次のやうな特徴を数へることが出来ると思ふ。

- (一) 「なむ」の用例は皆無である。「なむ」を含む曲調終止の文は存在しない。
 - (二) 「こそ」の用例も少く、その少い例も多くは逆接条件句を形成するもので、已然形終止の曲調終止の文は少い。
 - (三) 「や」は文中に於ては用例が少く、あつても同類の対句（並立句）の如き形を取るものが多い。
 - (四) 「ぞ」は文中に於ては疑問語なしに用ゐられることは少く、多くは、疑問語と共に用ゐられる。しかもその疑問語の種類は比較的限られてゐるらしい。
 - (五) 「か」は文中では疑問語と併用されて用ゐられるのみである。
 - (六) 「は」「も」は文中に用ゐられることは多いが、それも和歌和文に比べると用法が狭い。又「は」「も」を文末に用ゐる例は少い。
 - (七) 係助詞相互の重り合ひが少い。
- 以下右の各項について逐条述べ、最後に訓読に於て係助詞全般を

通じて考へられる性格を把握して見ようと思ふ。

係助詞の中、「なむ」「こそ」は、訓読文に於て用ゐられることが極めて稀である。所謂訓点資料に於て「なむ」が用ゐられてゐるものがあるが、それは、特殊な性格を帯びたものである。「こそ」を用ゐたものは、訓点資料の中でも、平安初期・中期のものに比較的多く見出されるが、後期以後のものでは、訓点資料の中でも特殊なものに偏つてゐるやうに見受けられるのである。

先づ、「なむ」の用例は、訓点資料の中では、管見では未だ一例も入らない。大体「なむ」といふ助詞は、平安時代に於ては、用ゐられるのは殆どが物語や日記等の散文の部分であつて、和歌には殆ど用ゐられてゐない。そしてこの「なむ」は、物語を展開して行く際に、話手が聞き手に対して念を押すやうに用ゐる語であることが説かれてゐる⁽¹⁾。

かやうな「なむ」が訓読に見出されないことからして、「訓読語」の言語的性格が所謂「物語」の類から隔りのあることが推測される。訓読の対象となつた漢籍仏典の中には、例へば、法苑珠林・冥報記・金剛般若経集験記・大慈恩寺三藏法師伝・高僧伝・日本霊異記などの如く、「説話」的要素、即ち「物語」的要素を含む文献も多いのであり、又、法華経や金光明最勝王経などの如く「説話」的内容を持つ經典も数多く存在するのである。それにも拘らず、これらの訓読を表した古訓点には、等しく「なむ」を見出すことが出来ないのである。これは、文献の實質的（概念的）内容（表現対

象」と、それを表現する主体の態度とが、本質的に別のものであることの表れでもある。「なむ」を用ゐるのは、表現する主体の態度であつて、表現主体が「物語」的態度によつて表現を行ふときには、このやうな「なむ」を多く用ゐるのであり、今昔物語等には、「なむ」を多く用ゐてゐるが、これはこの先行の漢文文献の訓読文には恐らく存在しなかつたのを、これらの文献を作成した作者が「物語」的態度で表現したからと考へることが出来よう。漢文を訓読する際には、原文を正確に解説するといふ点に力を注ぎ、表現対象を正確に把握しようとする段階に止まつたのであつて、更に一步進んで、その表現文を聞き手に対して「物語」一つで聞かせるといふ段階にまでは進まなかつたものと考へられる。そして、漢文に盛られてゐる内容であつても、それを「物語」的な方式で表現されることになれば、それは「訓読」の形としてではなく、更に一步進んだ「片仮名交り文」としての形で表現されたのであらう。それが今昔物語や打聞集などの類であつたと考へられるのである。

訓読も、その初め頃にあつては、師匠が弟子に対して講義を行つた際の言語であり、その当時の口語を反映してゐるのであると説かれて來てゐる。唯その際、師匠から聴者に対する発話が、果して一般の会話と同様な自由な会話語であつたかといふことになると、それは相当に疑問ではないかと思ふのである。少くとも後世に於ける或種の抄物の如き、比較的言語体に近いものであつたのではなからうか。平安初期の訓読には、既に所謂「訓読特有語」の多くのものが具備してゐたと認められ、その言語の特質は、やはり、漢文に添つて訓ずるといふ訓読の拘束を大きく受けてゐたものと考へたい。当

時からして既に訓読の言語は、師匠が聴者に向つてフリーに(經典から離れて)話しかけるといふものではなく、寧ろ師匠は漢文に向つて、その一語一句ごとに漢文に添ひつつ解説して行つたものなのであり、聴聞してゐる人は、師匠が漢文に面して訓下してゐるのを傍で聞いてゐるといつた程度のものであつたらうかと考へるのである。

それであればこそ、聴者は自己の有する経巻に乱雑ながら訓点を記入することが出来たのであらう。又更に考へるに、西大寺本金光明最勝王經や、根津本大乘掌珍論や、飯室切金光明最勝王經註釈の如き古点本の、欄外や紙背に註記として記入された片仮名交り文などこそ、本文の漢文の訓法から一往離れて聴聞者に向つて発せられた口頭の語を含んでゐたのではないかと考へるのである。

とにかく、訓読語に「なむ」が用ゐられてゐないといふことは、訓読語自体には「物語」的性格が生じてゐない、又生ずる余地が無かつたことを示してゐると考へられるのである。

所で、「東大寺諷誦文」に「ナモ」の例が二例ある。

凍水^{シミツル}出^シ所^ニナモ^モ凍水^ハ出^ル (凍水出^{デシ}所^ニナモ^モ後モ凍水^ハ出^{ツル}) (複製本、釈文19頁)

无明^モ是^{カク}ナモ^有ル (无明^モ是^{カク}ナモ^有ル) (同52頁)

この文献について、春日政治博士は「天長五年成実論点よりもや前のものではないかとさへ見られるものである」(最研下三二八頁)とされて居り、一見、一般の訓点資料と類似の形態を有つてゐるが、全体的に片仮名交りで記されて居り、又その用語に訓読語と異なるものがある⁽³⁾。ナモはいふまでもなくナムの古形であるが、この文献にこの語が二例ながら見出されるといふことは、この文献が

漢文に訓点を附して訓下した「訓読語」のではなくして、法会の際に、聴聞者に向つて語りかける説教の草稿であつたと推測するの
に好都合な事実であると思はれる。

二

コソの性格について、大野晋氏の所説がある。それは、「奈良時代のコソ……已然形の呼応の全用例を通じて（中略）一般には、コソ……已然形の呼応は逆接の前提句を形成した。また、前提句を形成しない場合でも、已然形で単純に断じせずに已然形の下を……ダガ、……ケレド、……ナノニ、……モノヲなどの訳語を与えるべきものが大部分を占める。これは「そこで、断じしない」という已然形の本来の機能によることである」（日本古典文学大系万葉集一補注三二二頁）と要約されよう（大野氏はこの他に「解釈と鑑賞」誌上で十回に亘りコソに関し詳説されてゐる。又その他の個所でも述べられてゐる）。

訓読語ではコソの用例は極めて少い。管見の及ぶ所ではその大部分は、
(一) 平安初期・中期の訓点本
(二) 平安後期以後の訓点本では、因明論疏関係の書か、或いは文藝的要素の濃い文献
(三) 訓点本に類似の形態を有するが、実は訓読語でなく、片仮名交り文と考ふべきもの。
の三つの何れかに属するものの如くである。そして又、その用法は、殆ど大部分は、大野氏の言はれる如き、逆接条件句を形成して

ゐるものやうである。

先づ平安初期、中期の訓点本に見られる例では、

金の体は清浄なりとにコソアレ、
「イ、金の体ヲ清浄ニアラシメムトニコソアレ、」金無（ク）したりと謂（ハ）非ずといふが
譬如ク（譬如……金体清浄非謂無金）（西大寺本金光明最勝王經卷第二白点。最研上二八頁）

設ヒ自論ニ違ハムトキハ、是レコソ自宗に違フベ（不明）、是レ共知スルニ違害スル過失ニハ非ズ（小川本大乘掌珍論卷第三、天曆九年（九五五）点。「古訓点の研究」二二〇頁）

右の中、西大寺本金光明最勝王經では、白点でコソを用ゐたのと同じ個所の本文を、永長二年（一〇九七）加点の朱点では、
譬（ハ）ば……金の体清浄なるに金無（シ）と謂（フ）に非（ズ）といふが如（シ）

と訓じ、コソは用ゐてゐないのである。又、天理本金剛波若經集驗記の平安初期点でも、「策云請報李丞並无別事」の「請報」の裏面に「マウサムトニコソ」と訓ぜられる仮名が見える（複製本第二冊四丁）。但しこの先の部分には仮名が無いので、文全体としてはどのやうな形になつてゐるのか明でない。

かやうに、平安初期にはコソが間々用ゐられてゐたが、金光明最勝王經永長点の例にも見られるやうに、平安後期以降は一般にコソの用法は一層少くなつたやうである。ただ次のやうな一二の点本にはその例が見える。

先づ、因明唯識関係の書では、平安後期以後に至つても若干のコソの例を知ることが出来る。

故(三) 設ケたる所の難は汝に於てコソ失有れ、非於我宗(故所設難於汝有失非於我宗) (石山寺藏成唯識論卷第一寛仁四年(一〇二〇)点)

識は是(レ) 名色(ノ) 依なりといふ(三) コソアレ、名色に撰(セムト) には非(ヌ) が故(識是名色依非名色撰故) (同右卷第八)

神我イ交用すトコソイへ(神我交用) (東大寺図書館蔵四相違略注釈天永四年(一一一三)点)

実徳義の性の不無コソハ即是能有(ナレ) 豈三に離(レムヤ) (実徳義性不無即是能有豈離三) (同右)

この四相違略注釈天永点については、中田祝夫博士「古点本の国語学的研究・総論篇」一〇〇八頁に於て始めて引用された資料であるが、コソの他にも助詞イ、「彼」「自」その他幾つか一般の点本と異なつた特異な点を含んでゐるものである。

漢籍の点本の中でも、白氏文集・遊仙窟には、コソの例が見える。

外キ人には見(エ) 不、見エば^{ウラヒモコソスレ} 広笑 (外人不見見広笑)

(神田本文集卷第三天永四年点、複製本九ウ。右はイ点の訓法で、本点は「笑(ハル) 応シ」と訓じてゐる)

無事とアデキナク風^{ウカ}レタル声^{ノミ}コソ他の耳に徹^{カヨ}フラメ(無事無事とアデキナク風レタル声ノミコソ他の耳に徹フラメ)

風声徹他耳(醍醐寺本遊仙窟康永点、複製本十六オ) 定て知ヌ、心に肯クベカラムコトヲ在レバコソ方便とアタカニ強^{ツカミ}に人を邀ギルラメ(定知心肯在方便強邀人) (同右、三十ウ)

右の部分は真福寺本でも大同でコソを用ゐてゐる(複製本二三頁・四三頁) が省略する。

又、日本書紀は、漢文の文体そのものは一往正格であるやうだが、その古点本の訓法に至つては非常に特異な点を多く備へてゐる。一般の訓法に少いコソの例も見出される。

イマコソタルツカヒトハハ、ワガトモタチトシテスリ、肘^ツ、肘^{オナシケニシテ} 今^{イマ} 為^{ナリ} 使者^{シヤ} 昔^{イマ} 為^{ナリ} 吾^ガ 伴^{トナリ} 摩^マ 肩^カ 触^ツ、時^{トキ} 共^{トモ} 一^{イツ} 器^キ

同^{トモ} 倉^{クラ} (前田本継体紀院政期点、複製本十丁)

食^シ 飯^{ハン}

この例はコソの結びが「使^{ツカヒ}タル者^{ヒト}ハ」で已然形結びとなつてゐないらしい(「為」にヨコト点らしきものがあり、この部分の解読は確でない)かやうな例は、和文にこそ例があるが、訓点では極めて稀な語法のやうである。

この他、訓点資料に類似のもので、平安期の片仮名交り文には、往々にしてコソの用例を拾ふことが出来る。前述の東大寺諷誦文には、

以^ヨコソ出世間之財^ヲ奉^ララメ奉^ル酬^ヲ(出世間ノ財ヲ以テコソ奉(報カ)酬シ奉ラメ) (二六頁)

僧^{コソ}乞^ヒ度^ノ救^ヲと地獄^モ令^シ生^ス天^ニモ令^ス生^ス淨^土ニモ(僧コソ乞度 地獄ヲモ救ヒ、天ニモ生レ令メ、淨土ニモ生レ令ムレ) (三六頁)

无^キ一^ノ利^ノモ子^ヲ友^等ヲコソ宣^ケレ愛^トハ……愚^ニ癡^{ナル}子^友等^ヲコソ宣^ケレ

珍^トハ宣^ヒケレ(一ノ利モ无キ子ドモ等コソ珍トハ宣(ヒ)ケレ、……愚カニ癡ナル子ドモ等ヲコソ珍シトハ宣ヒケレ)(三九一四〇頁) (他四例あり、省略)

東大寺図書館蔵七論三平等十无上義は、平安初期、貞観元慶頃の写しで、その本文の写しと略々同じ頃の朱で訓点を加へてあるものであるが、本文自体片假名交り文で綴つてあり、その中に往々にしてコソが見える。

答不爾、己コソ分段の宅モ未離變易の宅モは也(答(フ)、爾(ラ)不、己コソ、分段の宅をコソ、變易の宅(ヲ)は離(レ)未(ナレ)也)

問昔の法ハ淺ソレハ機ハ機ハ亦凡夫ナレ今法ハ深ソレハ機ハ機ハ亦成レ聖ト不用略説ハ唯可解脫(問(フ)、昔の法ハ淺ケレハコソハ機ハ機ハ亦凡夫ナレ、今(ノ)法ハ深ケレハコソハ機ハ機ハ亦聖(ト)成レ、略説(スル)をは用(キ)不(シ)て唯解脫(ス)可(シ))

會シ天コソ三乘を平説ハ一乘トハ然ハ平偏執シ天一乘不ル知有レ為レの機器ノ不同ナルことモ亦実ニ有二乘三乘ヲ會シテコソ一乘トハ説キタ

マ)へ、然(ル)モノヲ一乘(三)偏執シテ有レ為レの機器ノ不同ナルことを知(ラ)不ル(モ)亦実ニ二乘有リ(リ)

問心意形云時第八形を名レ心ト何故言心意形也(問(フ)、心意形(ト)イフ時、第八形を心トコソ名(ヅク)レ、何故(ニカ)心意形(ト)言(フ)也)

答有坐の凡夫は実未ア得三乗の果を此人亦発セ求三乗果之心を(答(フ)、有坐の凡夫は実(ニ)三乗の果を得未コソアレ、此(ノ)人(モ)亦三乘(ノ)果(ヲ)求(ムル)心ハ之ノ心ハ発セリ)

問於二三昧義者引介良曾止勝鬘經文平離ハは彼の心止觀禪等ハ已曾伊不乎乎言三昧義ハは、(問(フ)、三昧義(ニ)於(テ)と(ハ)〔者〕、勝鬘經(ノ)文ヲ引(キ)ケルゾトニアラバ、彼の心(ヲ)離(ルル)ニハ心觀禪等(ト)コソイヘレ、三昧義(ト)は言(ハ)不レヤ)

答望ステ前説ハ論義名既説テ種ト望望未未説無上上の義ニ名殘離無失也(答(フ)、前(三)説(ケル)論義ニ望(ミ)テコソ既(三)説(キ)テシ種トハ名(ヅク)レ、无上の義に説(カ)未(ルコトヲ)望(ミ)テハ、名殘性無失也)

問此は顯ス種子加無上奈留義文阿如何レ言丁顯ナ無上止云文(問(フ)、此は種子が无上ナル義(ヲ)顯す文ニコソアレ、如何(三)し(テカ)无上(ナリ)トイフコトヲ顯す文(ト)言(フ)ベキ)

この文獻は非常に解説が困難で、右の部分にも疑はしい箇所があるのであるが、とにかくコソが含まれ、しかもその中、逆接条件句を形成すると判断されるものが、多いやうである。

又、右の七論三平等十无上義の紙背に在る法華論義草は、平安後期の写であり、やはり片假名交り文であるが、これにもコソの例が幾つか発見される。

此云云コソ阿レ歸撰ト非謂ムハ者為ノ行法イ成返ト謂ム(此ヲ歸撰ト云(ハム)コトコソアレ、者為ノ行法イ成返ト謂ム(ハム)ト(三)ハ非(ズ))
与喜果受ト相應法ハ暫時ニ喜果スレ彼カ壞ル時ハ必生苦ラ故云壞

苦(「与」)喜果受ト相応スル法ハ暫時ニコソ喜果スレ、彼ガ壞
スル時ニハ必(ズ)苦ヲ生(ズルガ)故(三)壞苦(ト)云
(フ)

開導依ヲ云ハノ寛ハ何ソ云等无間縁ヲ(開導依ヲコソ)寛トハ云ハ
メ、何ソ等无間縁ヲ云(ハム)

又、東大寺図書館蔵因明義草は仁平四年(一一五四)の写で、こ
れも右に類した片仮名交り文の文献であるが、これにもコソの例が
見える。

只能用ノ化ノ鉢ヲコソ為正キ争^{トカレバ}是有能用ハ通真似ニ故(只能用ノ
化ノ鉢ヲコソ正(シ)キ争トハ為(レ)、是有能用ハ真似(ニ)
通(ズルガ)故(三))

このやうに、訓読に於ては、僅かながらコソの用例が見出される
のであるが、これらの用例を源氏物語等の和文の用法と比較して考
へられることは、次の諸項であらう。

(一)「こそ」は殆どすべて已然形の結を従へてゐる。源氏物語等
では、

おほえこそおもかるべき御身のほどなれど、御よはひのほど
人のなびきめできえたるさまなど思にはすき給はざらんも
なきけなくさうさうしかるべしかし(帚木一〇七二—三)
などの如く、「こそ」の結びの消えた例があるが、かやうな例
は訓読には殆ど見られない。

(二)「こそは」と係助詞「は」を伴つた例がない。

(三)「おもひこそいれ」「おもひこそしれ」「おもひこそやれ」
(以上何れも源氏物語)の如く、複合動詞の間に挿まつた用法

がない。

四 「右近の君こそ」「上こそ」「北殿こそ」「大将こそ」(以
上何れも源氏物語の例)のやうに、呼掛に用ゐられる「こそ」
がない。この「こそ」は終助詞的なものであつて、係助詞と同
語か否か、検討する余地もあるかと思はれるが、通説に従つて
一往取上げたのである。

このやうに訓読語に於けるコソは、用例も用法も、和文に比して
非常に乏しいのであるが、斯かる現象は果して如何に解釈すべきで
あらうか。思ふに、コソはその前後の語句を卓立強調する機能を有
するが、原漢文に於てはコソに該当する漢字は存在せず、又、漢文
を訓読する際にも、原文の意義を解する段階に止まつて、それに部
分的に強調の調子を附し現はすまでの段階には至らなかつたことを
示すものと考へられる。又、訓読では稀にコソを用ゐても、多く条
件句を形成するのに用ゐた程度で、他人への呼掛や複合動詞に挿ん
で用ゐるなどの多様な用法までは及ばなかつたのであらう。

三

「ぞ」は、係助詞の中では訓読で比較的多く用ゐられる語であ
る。しかし、和文に比べると、やはりその用法は局限されてゐると
認められる。即ち、文中に於ける「ぞ」は、多くの場合疑問語の下
に附して用ゐられ、疑問語の無い文中で単なる強調として用ゐられ
る例は、非常に少いやうである。

恐(ルラ)クは子をソ食むヤ(恐食子) (西大寺本金光明最勝
王経卷第十白点)

後に子を失(ヒ)つル時にゾ憂苦することは多かりケル(後失子時憂苦多) (同右)

便が「之」方なる(ヲ)ゾ方便と名へる(便之方名方便) (法華經玄贊卷第三天曆頃点、五九行)

言説(スル)所有(リトモ)、意(ノ)趣知(ルト)いへるコトぞ難(カ)ラム(有所言説意趣難知) (同右、六五行)

これらは、文中の係として用ゐられた稀な例であつて、多くは平安初期中期の点本に偏つて存するやうに見受けられる。

次に、文中に於て、疑問語の下に伴つて用ゐられるゾの用法は、

「イカニゾ……」「イツクニゾ……」「イツコニゾ……」「ナニゾ……」(及びそれらの撥音便形の例)が多く、同じ疑問語でも、右以外の語の下に附いたもの、例へば「イズレゾ……」「タレゾ……」「ナニヒトゾ……」「ナニノユエニゾ……」などの例は、一般には少なくて、唯平安初期の点本に限られてゐる如くであり、平安後期以後では「イズレカ……」「タレカ……」「ナニヒトカ……」「ナニノユエニカ……」のやうにカを用ゐることが多くなつたらしい。但し同じゾでも、文末では、平安後期以降でも、「……タレゾ。」……「ナニヒトゾ。」のやうな言ひ方が多く用ゐられてゐた。次に右の諸例を一二示す。

「イカニゾ・イカンゾの例」

非定非惠斯焉取斯(「斯焉」の裏にイカニゾ) (天理本金剛波

若經集驗記平安初期点、複製本第一冊二六丁)

孰ゾ「焉」龍(ノ)「之」処る所を知(ヲ)む(孰焉知龍之所

処) (漢書楊雄伝天曆点、複製本四オ)

「イツクニゾ・イツクンゾ・イツコニゾ・イドコンゾの例」

焉肯動而行乎(「焉」の裏に「イツクニゾ」) (天理本金剛波若經集驗記平安初期点、複製本第一冊四丁)

焉ンゾ同年(ニシ)而語フ可(ケ)ムヤ(焉可同年而語)

(慈恩伝卷第七承徳点、八三行)

安ゾ司天台(ノ)高サ百尺ナルヲ用テ為ム(安用司天台高百

尺為) (神田本文集卷第三天永点、複製本一四丁オ)

安ゾ疑惑せ不(ル)こと得(ム)耶(高山寺藏大日經疏永保

二年(一〇八二)点)

「ナンゾの例」

何ぞ斯の「之」道に由(ル)もの莫(カラ)む(何莫由斯之道)

(西大寺藏不空續索神咒心經序寬徳点)

次に、イカナルゾ……・タレゾ……・ナニノユエニゾ……などの

言ひ方の例を示すが、上述の如く、多くは平安初期の資料に偏つ

てゐるやうである。

何なるをゾ(者)名(ヅケ)て二無所有と為ふとならば(何者

名為二無所有) (西大寺本金光明最勝王經卷第二白点、二六

頁)

我が子を誰ゾ屠リ割りて骨のみを余して(于)地に散ケたる

(同右卷第十、一九五頁)

何(ノ)故にぞ独り十五日に涅槃シタマフ(何故独十五日涅槃)

(故山田嘉造氏藏弥勒上生經贊平安初期朱点)

如我今者何レノ所(三)ゾ行(フ)宜キ(如我今者何所宜

如我今者何レノ所(三)ゾ行(フ)宜キ(如我今者何所宜

行) (石山寺藏大唐西域記卷第四長寛点、中田博士解説文六〇
六頁)

復伺の因縁を以てゾ号を名(ヅケ)て「日」天子といふ(復以
何因縁号名曰天子) (西大寺本金光明最勝王經卷第八白点)

案するに、文中に於けるゾは、訓読では用例が少ないのであつて、
疑問語に附属する場合でも、すべての疑問語には附かず、ナニ・イ
ヅクの如き少数の語彙に限つて辛うじて生き延びたものものではな
からうか。元来ゾはそれ自体強意を表はすのであるが、疑問表現に
際しては、相手に対して話手の意図を相当に強く打出す必要がある
為に、強調のゾを伴ふやうになつたのではなからうか。(この事情
は恐らくカについても起源的にはゾと同様と考へられる。唯、カの場合
はゾよりも少し使用範囲が広いやうに考へられるが、これは、カ
カそれ自身に疑問の意が既に伴つてゐることが多いことと關係があ
るのであらうか。)

「ナンゾ……ナルヤ」のやうに、文末にヤを伴ふ例が往々にして
見える。

奚ぞ三段の「之」得失を問(ハム)や(奚問三段之得失) (法
華義疏序品初長保点)

而(ルニ)此ニシテ見(ル)所、何ゾ其(レ)太(タ)大ナル
ヤ(而此所見何其太) (大慈恩寺三藏法師伝卷第四永久点、
三三四行)

何ゾ爾(ラ)不(ラム)ヤ(耶) (何不爾耶) (東大寺図書館
藏法華經抄長承三年(一一三四)点)

曷ゾ能ク雪山を指(シ)而長(ク)驚セ、龍池に望(ミ)て
ナ

〔而〕一(タ)ピ息(フ)者哉ラムヤ(曷能指雪山而長驚望龍

池而一息者哉) (大唐西域記序長寛点、中田博士解説文五二二
頁)

この際のヤは感動のみを示すものか、又は既に疑問の意を含むも
のか、尚検討を要することであらう。

ゾには他に「ナンゾ……」といふ言ひ方、又、文末に用ゐる言ひ
方などもあるが、先学の所説に譲り、本稿では述べないこととす
る。

四

文中に於けるカは、平安時代の訓読に於ては、必ず疑問語の下に
伴つて用ゐられてゐる。平安時代の仮名文の例で見ると、和歌の中
には、疑問語なしに文中にカが用ゐられることもあるが、一般の散
文では疑問語と共に用ゐられるのが普通らしい。奈良時代には、
あたみたる虎可ほゆると(万葉二ノ一九九)

大御船待ち可恋ふらむ(同二ノ一五二)

のやうに、疑問語を伴はずに文中の係として用ゐられることが多か
つたが、訓点ではこのやうな例を未だ見出してゐない。若し発見
出来たら、古代語法の残存の例として興味ある現象と考へられるの
である。

さて、訓点では、文中のカは次に示すやうに、イカ・イツク・イ
ヅレ・タレ・ナニなどのやうな疑問語と共に用ゐられてゐる。この
用法は右に述べたゾと同類であるが、ゾよりもカの方が用法が広い
と考へられる。

〔イカ(如何)に伴ふ例〕イカニカ(音便でイカンガ・イカガ)、

イカニシテカ・イカニスレバカ・イカデカなどの例がある。

某乙等今追怨家、来至大王、若為処分（「若為」の裏に「イカニカ」）天理本金剛波若經集驗記平安初期点、複製本第二冊一丁）

深累如^罪何自^罪（ラ）免レム（深累如何自免）（慈恩伝巻第八承徳点、二六〇行）

經途既遠、若為能到（「若為」の裏に「イカニシテカ」）（天理本金剛波若經集驗記平安初期点、複製本第一冊八丁）

云何にスレバカ身の衰壞し諸の大の増損すること有ル（云何身衰壞諸大増損）（西大寺本金光明最勝王經白点）

心（三）自（ラ）疑（フ）所有（リ）、傍人^{イカデ}那カ知（ル）ことを得む（心自有所疑傍人那得知）（書陵部藏文鏡秘府論地巻保延四年（一一三八）点、六オ）

○イヅク・イヅク・イドコに伴ふ例）

○イヅクで主格に立つ例）

畢竟空の中に誰^{イカデ}か罵する者有（ル）（畢竟空中誰有罵者）

○イヅクニカ・イヅクニカ・イドコニカ（又はその音便形）の形で、連用修飾格に立つ例）

詎^{イカデ}ニカ安多増（詎安多増）（知恩院藏法華經玄贊巻第二平安中期点）

室（三）入（リテ）問フ、何^{イカデ}ンカ之^{イカデ}クト（入室問何之）（書陵部藏文鏡秘府論東巻保延点、十八オ）

復何クニカ生ラ受（ケ）ム（復何受生）（東大寺図書館藏新修往生伝保元点）

爾の家は安^{イカデ}ニカ在ルト（爾家安在）（石山寺藏大唐西域記巻第三長寛点、五五三頁）

那^{イカデ}にか去（ラ）ムといふことを知（ラ）不（不知那去）（大智度論巻第九十七天安点、大坪氏による）

勝^{イカデ}の字は何ニカ在（ル）（勝字何在）（四相違略注釈天永点）

聞ク、師、制惡見論ヲ作（レ）リト、何^{イカデ}カ在ル（聞師作制惡見論何在）（慈恩伝巻第五永久点、一一二行）

其（ノ）証安^{イカデ}カ在る「乎」（其証安在）（大東急記念文庫藏顯密二教論天喜点）

我^キを將て安^{イカデ}カ之カムト欲スル乎（欲將我安之乎）（呂后本紀延久点、一四オ）

聊に問フ、何^{イカデ}カ居ルト（聊問何居）（東大寺図書館藏弘贊法華伝保安点）

右のイドコカは恐らくイドコンカであらう。

何ニカ往^{イカデ}キ何（ニカ）来リテ、「於」誰ガ家（ニカ）宿ル（何往何来宿於誰家）（將門記承德点、二十七ウ）

右のドコニカはイドコニカのイを省記したものか、或いはイの音が脱落したものかどちらかであらう。

総じて右の諸例は何れも場所を示す為に用ゐられた例であるが、賢（三）非（サレバ）安^{イカデ}カ任（フ）可（キ）（非賢安可任）

(文鏡秘府論地卷保延点、三ウ)

右のイヅクンカノ例は、場所を示すのではなく、陳述副詞としても用ゐられたものの如く、比較的少い例ではないかと思ふのである。

〔イヅレに伴ふ例〕

○「イヅレカ」の形で主格に立つ例。

蓄^{ワザハヒ}孰^シカ焉^カヨリ大ナラム (蓄孰大焉) (孝文本紀延久点、一七頁)

○「イヅレノ……ニカ」の形で連用修飾格に立つ例。

下は是レ第三の何レノ事の疑の義にカ依るト(イフ) (下是第

三依何事疑義) (法華經玄贊卷第三淳祐点、一九五頁)

猿^{イヅレ}の声^カ幾^カの処^カにカ^カ催^カス (猿声幾処催) (文鏡秘府論天卷保

延点、十二オ)

〔タレに伴ふ例〕

○「タレカ……」の形で主格に立つ例。

詎^{タレ}カ幾^カの人有^ル (詎有幾人) (東大寺藏大般涅槃經卷第十

七平安後期点)

孰^{タレ}カ敢^テ毀^シ誹^{セム}セム (孰敢毀誹) (興福寺藏大慈恩寺三藏法師伝

卷第八承徳点)

○「タレノ……カ」の形で主格に立つ例。

誰^レノ者^カ憐^{ハム}ハム (誰者憐之) (史記呂后本紀延久点、七オ)

○「タレニ……テカ」の形で連用修飾格に立つ例。

何^{ケレ}ニ觀^テテカ名^{ケテ} 相違^ト因^トと為^セマシ (何觀名為相違因) (四相違略註釈天永点)

○「タレノ……ヲカ」の形で目的格に立つ例。

更^ニ (三) 誰^ノ人^ヲカ^カ凭^{マム}マム (更凭誰人) (吉水藏諸仏菩薩本誓

願要文集嘉承三年 (一一〇八) 点)

〔ナニに伴ふ例〕

○「ナニカ」又はその音便「ナンカ」の形で主格に立つ例。

誰^{ナニ}カ是^レ一切^ノ諸善^ノ根本^{ナリ} (誰是一切諸善根本) (大

般涅槃經卷第十五平安後期点)

功德^ヲ樹^テ (テ) ムト欲^フ、何^カ最^モ饒^益スル (欲樹功德何最饒

益) (慈恩伝卷第七承徳点、一二八行)

〔于〕時^ニ (三) 奈^何又^並 (于時奈何又並) (真福寺本将

門記承徳点、二二オ)

不退^ト (与) 不^転と何^カ異^ナる (不退与不転何異) (法華義疏

序品初長保点、中田博士解讀文三四六頁)

○「ナニ(ン)ノ(体言)カ」の形で主格に立つ例。

爾^何の所^須カある (爾何所須) (西大寺本金光明最勝王經卷第

八白点、一五七頁)

甘雨^何の益^カアル (甘雨何益) (大東急記念文庫藏顯密二教論

天喜五年 (一一〇五七) 点)

爾^何の須^{ムル}所^カアル (爾何所須) (石山寺本金光明最勝王

經卷第八平安後期点)

慈^氏に何^ノ相^カマシマス (慈氏何相) (大唐西域記卷第五長寛

点 二九〇頁

○「ナニニカ」「ナニヲカ」「ナニノ……ヲカ」「ナニノユエニカ」「ナニニヨリテカ」「ナニヲモチテカ」などの形で連用修飾格に立つ例。

亦奚、カ用フ〔焉〕（亦奚用焉）（前田本仁徳紀院政期点、六十二年五月）

何をか〔者〕四と為る（トイフ）（何者為四）（法華經玄贊卷第三天曆頃点、二二一頁）

是の色は誰をか初と為る（是色誰為初）（大日經卷第一長保点）

汝は何ヲカ為ル（大唐西域記卷第五長寬点、六二九頁）

何の故（ニ）か此の經の得道の前後に就て次第を明（ス）（何故此經就得道前後明次第）（法華義疏序品初長保点）

二の問は何に依てか道を行ぜむ（トイフナリ）（二問依何行道）（法華義疏序品初長保点、三二三頁）

何ニ因テカ忽ニ此ノ言ヲ出（シ）タマフ（何因忽出此言）（慈恩伝卷第十承徳点、七三行）

何を以てか禁ゼム（何以禁之）（史記孝文本紀延久点）

若（シ）師ノ福徳冥祇ヲ感動スルニ逢（ハ）不（ラ）マシカバ、何ヲ以テカ啓キ誨（ハ）タマフコトヲ聞（ク）コトヲ得マシ

（若不逢師福徳感動冥祇何以得聞啓誨）（慈恩伝卷第三永久点）

世尊是の諸の天子は何の因縁をか以キシ、何の勝行をか修セシ

（世尊是諸天子以何因縁修何勝行）（西大寺本金光明最勝主經

卷第九白点）

卷第九白点

○「ナニノ……テカ」「ナニノ……アレバカ」の如く、並列句・条件句

の下に附いて、接続句に立つ例（既述の「ナニニヨリテ」「ナニヲモチテ」も並列句の下に附いた例ではあるけれども、それらはニヨリ・ヲモチが形式動詞的用法なので、上の如く扱つたのである）

何ノ面目あてか高帝ニ地下に見エム（何面目見高帝地下）（呂

后本紀延久点、四オ）

更ニ何ノ事有テカ以テ光揚ス可キ（更有何事可以光揚）（慈恩

伝卷第八承徳点、三〇三行）

何の闕け少ぬ所アレバカ三が和合すること（ヲ）待（ツ）（何

所闕少待三和合）（石山寺藏成唯識論卷第一寬仁点）

何の因縁を以（テ）か釈迦牟尼如来の寿命短促にして唯八十年

ノミイマスラむと（石山寺本金光明最勝主經卷第一平安後期点）

何の文をモチカ因の……（ヲ）証する（何文証因……）（四相違

略注釈天永点）

この類で、「何ノ……タレカ」と訓ぜられる例が西大寺本金光明

最勝主經卷第九白点に存するが、例外的なものであらう。一般には、

「……タレバカ」となる所であらう。

何の善根を種（エ）タレか〔從〕彼の天ヨリ来て暫の時法を聞

て便授記を得ル（種何善根從彼天來暫時聞法便得授記）

カが文末に来る例は、訓読にも多く存する。この点は和文と大差

ないやうに考へられる。文末の力は疑問の意とも感動の意とも用の

られるが、感動の意を表はしたものは、「乎」「矣」「哉」「焉」

「也」などのやうな漢文の助辞の訓として用ゐられたものが多いやうに見受けられる。

三宝ヲ紹隆セムコト、其レ茲ニ在ラムモノ乎（紹隆三宝其在茲

乎) (慈恩伝巻第八承徳点、一八五行)

故以(ミ)レバ、道、聖劫ニ光リ、化、含靈ニ洽(ア)キ者矣(カ) (故以道光聖劫化洽含靈者矣) (同右、三五九行)

豈(ニ)心(ニ)「於」彼此(ヲ)縁シ、情(ニ)「於」名利ニ染

(ム)ト曰ハム者哉(カ) (豈曰心縁於彼此情染於名利者哉) (同

巻第七、二三七行)

蓋(シ)彼岸(ノ)「之」津涉、正覚(ノ)「之」梯航タル者

焉(カ) (蓋彼岸之津涉正覚之梯航者焉) (右、九五五行)

而して、単なる補説の例は比較的少いと考へられる。

復次菩薩摩訶薩い、無心定に入(リ)ヌレども、前の願力に依

(リ)て「從」禪定ヨリ起(テ)シテ衆の事業を作すか(カ) (復次菩薩摩

訶薩人無心定依前願力從禪定起作衆事業) (西大寺本金光明最

勝王經巻第二白点)

又、鎌倉時代の資料であるが、群書治要巻第三所載の毛詩の建長

五年(一二五三)の清原教隆点に

嗟、我人を懐(フ)、彼(ノ)周行に眞(カ)ヌカ(カ) (嗟我懷人眞彼周

行) (巻耳)

皎々タル白駒、我が場の苗を食(マ)ヌカ(カ) (皎々白駒食我場苗

(白駒)

の如き「ヌカ」の例がある。これは毛詩の点本には他にも大念仏寺本や静嘉堂文庫本にも見え、又、古文孝経にも見えて、清家の点法の一と見られるものであるが、遡つては凶書寮本類聚名義抄にも、

貽(オ)ラヌカ(カ)詩(九七七) 誘(ミ)ヒヒカヌカ(カ)詩(九四七)

の例があつて、由来の古いことが知られる。これは、勧誘のやうな

意味であつて、疑問の一用法とも見られるものであるが、とにかくカの終助詞的用法の一として言及して置く。

五

ヤは、訓読の用例は殆ど文末のものばかりであつて、文中に係として用ゐられる例は非常に少いと考へられる。先づその少い例を示すと、

善男子「於」意に云何。是の人の所獲の功徳をば、寧(ロ)多しと

ヤ(カ)為る、(あら)不(チ)ヤ(カ)する(善男子於意云何是人所獲功徳寧

為多不) (西大寺本金光明最勝王經巻第三白点)

其の虚実たる彼の十千の魚は為(シ)死(ニ)てヤ(カ)ある、為(シ)活

(キ)てヤ(カ)あるといふことを験(セ)シむ可(シ)可(シ)……験其虚

実彼十千魚為死為活) (同右巻第九白点)

今者「為」存してヤ(カ)います、亡(セ)たまひてヤ(カ)ある(今者為

存亡) (同巻第十白点)

是は究竟の法なりとヤ(カ)為む、是は所行の道なりとヤ(カ)為む(山田

本法華經方便品平安初期点)

聡恵の王の法を成(セ)ルイは、升進してヤ(カ)スル、沈淪してヤ(カ)スル

(ト)為(シ) (聡恵王成法、為升進沈淪) (聖語藏地藏十輪經巻第

五元慶点)

如來此の宮の中に在(マ)スニ、独り処(タ)マフトヤ(カ)為(ム)、眷属有

(リ)トヤ(カ)セム「乎」(如來在此宮中為独処有眷属乎) (東京

国立博物館蔵大日經疏巻第一康和四年(一一〇二)点)

更に問へ、連環してヤ(カ)置かむ「耶」(更問連環置耶) (架蔵大

日經疏保延点)

斯を礼トヤせる、自の爲(三) 自を礼トヤする「矣」(礼斯爲自礼自矣) (吉水藏真言淺深隨聞記院政期点)

若三周法輪共ニ地義ニシテヤ説授シ爲當每三道ヤ説授シ(若(シ)三周ノ法輪ヲ共ニ地義ニシテヤ説(キ)授(ケタマ)ヒシ、當每三道(ノ)爲ニヤ説(キ)授(ケタマ)ヒシ) (東大寺図書館藏法華論義草平安後期写)

概して右の如くであつて、「ヤスル、ヤスル」といふ並立の形で述べられるのが普通である。最後の例は文献としては純粹な訓点本ではなく、片仮名交り文であるけれども、このヤの用法に関する限り、訓点資料と軌を一にする如くである。かくて、「ヤ」の文中に於ける訓読に於ける用法は、やはり偏つてゐると見ることが出来るよう。

和文の「ヤ」には、後に來るべき「あらむ」「なる」などを省略した形がある。

おはすらん所にたづねゆかんとねがひ給ひしるしにや、つるにうせ給ひぬれば(源氏・桐壺一九八)

そのしなじなやいか。いづれをみつのしなにをきてかわくべき。(同・帚木三八二)

あはれのことや。此あね君やまうとの後のおや。(同六六二) 右の如きヤの用法は、訓点本には滅多に見当たらないやうである。

東大寺図書館藏四相違略注釈天永点には次の例があるが、これは珍しいものと思ふ。この点本は他にも注意すべき語法が多く、それは上にも述べた通りである。(三二頁上段参照)

為シ諸相違喩は必通ニニヤ(為諸相違喩必通二) 「なれや」「たれや」といふ形は、平安時代には主として和歌に

用ゐられたが、

秋ののにをく白露はたまなれやつらぬきかくるくものとすぢ(古今二二五、文屋あきやす)

世の中はうきものなれや人ごとのとにもかくにもきえず苦しき(後撰一一七七、紀貫之)

夫の河冬は氷にとちたれや石間にたぎつ音だにもせぬ(後撰四八九)

このやうな「已然形+ヤ」の形は訓読では殆どその例を見ない。唯、前田本仁徳紀には

鳴牡鹿矣、随相夢也

の如き例が見えるが、日本書紀古訓は他の一般の訓点と比べて特異な相を呈してをり、別扱ひすべきものの如くである。

又、文中の主格や連用修飾格の直後に位する「也」字を、現在の訓読では「ヤ」と訓じ、間投助詞のやうに用ゐられることがあるが、古くこのやうな用法は無かつたやうに考へられる。古くはかやうな「也」は不読字とされるのが例であつたやうである。

法師ノ盛徳(アル)コト(也)彼(ノ)如(シ)、時二逢(フ)コト(也)此ノ如シ(法師盛徳也如彼逢時也如此) (慈恩伝卷第十承德点、二五六行)

皇唐(ノ)「之」天下(ヲ)有(テル)こと(也)、金輪(ヲ)運(シテ)「而」四有(三)臨(皇唐之有天下也運金輪而臨四有) (同卷第八承德頌朱点、二九行)

然(レ)ば東国(ノ)「之」歌は(也)、「韻を結(ビ)て(以)詠を成す(然東国之歌也結韻以成詠) (興福寺藏高僧伝康和点

是ノ時〔也〕、煙収^{ヨシナ}リ霧卷^{カケル}テ、景麗^{カケル}シク風清^スメリ〔是時也〕
煙収霧卷景麗風清〕（慈恩伝巻第十承德点、二二二行）

法師（ノ）〔之〕生レシトキ〔也〕、母夢ミラク（法師之生也
母夢）（慈恩伝巻第一永久点、一四四行）

ヤが文末に用ゐられる場合は、和文の類とさほど異なつた点を見
出せないやうであるが、一二氣附いたことを述べると、先づ、訓読
に於て、文末に用ゐられるヤの意味は、疑問の場合と反語の場合と感
動の場合とが存する。そして何れの場合にも、単なる補説として附
せられた場合と、哉・乎・耶などの助辞の類に対応する訓として
て附せられた場合とがある（ここで「対応する」と言つたのは、哉・
乎等の漢字の傍に直接ヤと書附けた場合と、その直上の漢字の補説
の形として書附けた場合とがあつて、少くとも院政時代頃までは、
一般的に何れとも定つてゐなかつたやうに認められるからである）
先づ、疑問の意に用ゐられた例では、

何ぞ〔於〕^{ナニガ}蒼々^{ソソク}（ヨ）愧（ツル）ヤ〔乎〕（何愧於蒼々乎）

（大東急記念文庫蔵三教治道篇保安点）

是（レ）先亡ヲ見マク欲セム乎（是欲見先亡）（東大寺蔵法華

経伝記大治点）

摩訶薩ニ非（ザル）自（リ）ハ、其レ孰カ之ノ若クセム乎（慈

恩伝巻第十承德点、二九〇頁）

木又阿遮利邪ニ、敬テ問（フ）コト無量ナリ、少病少惚ナリヤ

（木又阿遮利邪敬問無量少病少惚）（同巻第七、三〇〇行）

頗シ法師の名は宝積といふが、功德成就して衆生を化する有り

ヤ（頗有法師名宝積功德成就衆生）（西大寺本金光明最勝王

経巻第九白点

又疑問の意で文末に用ゐられるヤには「不」などの漢文を訓む
のに「ヤイナヤ」といふ形があつて、これは訓点特有の形ではな
いかと考へる。

和上決定シテ弥勒ノ内衆ニ生（ルル）コト得タマフヤ不ヤ（和
上決定得生弥勒内衆不）（慈恩伝巻第十承德点、一一八行）
次に反語に用ゐられた例。

豈（三）直秋（ノ）〔之〕氣為（ルコト）、良トニ歎ヲ増（ス）

ノミナラムヤ〔笑〕（豈直秋之為氣良増歎矣）（興福寺蔵大慈

恩寺三蔵法師伝巻第九承德点、三八一行）

豈に悦時有（ウ）むや〔也〕（豈有悦時也）（石山寺蔵法華義

疏譬喻品初長保点、五〇四頁）

形曲リテ影ヲ直クセム（コト）、其レ得可ケムヤ〔乎〕（形曲

直影其可得乎）（興福寺蔵大慈恩寺三蔵法師伝巻第八承德点、

二六四行）

豈（三）謂ヒキヤ、一朝ニ奄ニ万古ニ帰セムコトヲ（豈謂一

朝奄帰万古）（巻第七、二三四行）

次に感動に用ゐられた例。

之（ヨ）舒明（スル）者、其の（ヒトハ）惟（レ）法師ナリヤ

〔乎〕（舒明之者其惟法師乎）（知恩院蔵大唐三蔵玄奘法師表

啓平安初期点）

身を忘（レ）て物を済フことをもスルヤヤ（忘身済身）（西大

寺本金光明最勝王経巻第十白点）

感動に用ゐられた例としては、カナヤの形が訓点では相当に多い

のであるが、源氏物語には見出すことが出来ない。

大矣哉ナレカナヤ、悲智ノ妙用、得テ「而」言ヒ象スコト无ケムマツラハ（大

矣哉悲智妙用无得而言象）（慈恩伝巻第八承徳点、二〇三行）

夫レ以（ミ）レバ嗚呼痛イ哉アイトヤ苦（シキ）哉（ヤ）（夫以嗚呼

痛哉苦哉）（吉水藏諸仏菩薩本誓願要文集嘉承三年（一一〇

八）頃点

尚、「況ヤ……ヲヤ」の「ヤ」も恐らく感動の意であらうと思は

れる。又、疑問のヤとして挙げた右の例の中でも、タレ、ナニなど

の疑問の語と共に用ゐられた例は、疑問の意はタレ、ナニなどの部

六

「は」は訓点に於ては殆ど大部分が文中に用ゐられた例であつ

て、終助詞的に文末に用ゐられて感動の意を表はす例は僅かしか出

ることが出来ない。その僅かな例は、主として平安初期の点本類に

偏つて見出されるやうである。

此の諸の衆生は上中下有ルをモチテ、彼の機性に随（ヒ）て而

も為に法を説（カ）むむはとオモフオモフ（西大寺本金光明最勝王經

巻第一白点、一八頁）

「は」の文中に於ける用法としては、「名詞十は」「副詞十は」

「……をは」「……には」「……とは」「……ては」などの連続が

あるが、「名詞十は」の場合は多くは主格を表はし、目的格は「……

……をは」で表はすことが多いらしい（一般に訓点では目的格を表は

すのに格助詞「を」を用ゐることが多い。「……には」「……と

は」は連用修飾格を形成し、「……ては」は接続格を形成するわけ

で、この点一般の和文脈と同様である。ただ訓点で特有の「は」

の用法といへば、一つは、「あるいは」「いふころは」「ねがは

くは」の如く、上の語と合して熟語の如く固定して用ゐられるもの

が多いこと、「はこそ」「はぞ」「はも」「はなむ」「はや」「こ

そは」「ぞは」「やは」「かは」などの如く他の係助詞と重用され

ることが少いことであらう。

かやうに、「は」については、訓点一般としては特に顕著な特徴

はあまり見られないのであるが、訓点の世界の中だけに限つて考へ

ると、平安初期の点本と後期以降の点本とは、「は」の用法に若

干の差異があつて、初期のものに比較的多く用ゐられるといつた傾

向を看取出来るのである。例へば、西大寺本金光明最勝王經巻第一

の白点の中で次の如き用例がある。

一切の諸の海の水 其の滄の数をば知（リ）ヌ可シ 能

く、 釈迦の（之）寿命を、数へ知ルヒトは有（ル）こと無ケ

む……仮使ひ虚空を量りて 辺際を尽すことは得つ可し。

能ク、 釈迦の（之）寿命を度知するヒトは有（ル）こと無

（ケ）む……最勝は寿無量なり。 能ク知り數フル者は莫し

右は一句五字の偏の部分であつて、他の部分に比し殊に「は」の

用法が頻繁のやうに認められる。一般にかやうな偏の部分は、この

白点では、比較的「は」「も」が頻用されてゐるやうであるが、こ

れは偏といふ殊に感動的な表現の部分と、係助詞の本質とが無関係

ともあれ、この部分は、後世の点本で見ると、「は」の用法が非常に少なくなつてゐることに氣附く。即ち、石山寺旧藏本の平安後期

点⁽⁶⁾では右と同じ箇所を次のやうに訓じてゐる。

一切の諸の海の水をば 其(ノ)滴の数をば知ぬ可し 能く、
釈迦(ノ)〔之〕寿量をば教へ知(ル)こと有(ル)こと無(ケ)む……
假使虚空を量(テ) 辺際をば尽(ス)こと得可(ケ)む 能く 釈迦(ノ)〔之〕寿量をば度り知(ル)こと有(ル)こと無(ケ)ム……
最勝にして寿無量なり 能く数を知る者莫けむトノタベリ

此処に於ては、西大寺本白点に於て傍線を附した「は」は用ゐられてゐないのである。次に西大寺本の永長二年(一〇九七)朱点の訓法を見ると、次の如くである。

一切の諸(ノ)海(ノ)水をば 其(ノ)滴、シ数をば知ぬ可(クトモ) 能(ク)、
釈迦(ノ)〔之〕寿量をば知(ル)こと有(ル)こと無(ケ)む……
假使虚空を量(テ) 辺際を尽(スコト)得可(クトモ) 無有能教知 釈迦之寿量 最勝(ノ)寿は量無(シ) 能(ク)数を知(ル)べき者莫し

の如くであつて、やはり白点よりも「は」の少いことが知られる。

訓読では「は」が他の係助詞と重ねて用ゐられることが少いやうである。「こそは」「やは」「ぞは」「かは」などの例は殆ど見られない。

誰^{カハ} 許沙銅体受水菓(石山寺藏成唯識論寛仁点) などは珍しい例ではないかと思ふ。

七

「も」は本来は感動・強意を表はす語であつたのであらう。訓読に於ける特性としては、第一に、文末に用ゐられて感動の意を表はす用法が殆ど存しないことである。和文でも、平安時代には主として和歌又は歌集の序文に用ゐられたに過ぎぬやうである。

春霞色のちぐさにもえつるはたなびく山の花のかけかも(古今春下・一〇二・在原元方)

山しなのをとの山のをとにだに人のしるべくわがこひめかも(古今恋三・六六四)

たねしあればいはにもまつはおひにけり恋をしこひばあはざらめやも(古今恋一・五二二)

はなざかりすぎもやするとかはづなくるのでやまぶさうしろめたしも(大和五八段)

いにしへをあふぎていまをこひざらめかも(古今仮名序)

訓点では日本書紀の古点本の中で、
悲^{カシキカモツ} 兮^{キカモ} 惜^{カモ} 兮^{カモ} (前田本仁徳紀)

既経^{カネ}多年、甚哉^{カネ}(書陵部本允恭安康紀)

などの例が稀に指摘されるに過ぎない。又、和文に於て、いとおしかりしものこりにあけもはて給はでけうそくををしよせてうちかけて(源氏・未摘花二二八11)

みし人かげのあせも行かな(源氏・賢木三四四12)のやうに動詞と動詞との間に「も」が介入する用法も、訓点では見出されないやうである。

平安初期の訓読では、後世に比較的少くなつたやうな用法が一二指摘される。その一つは、「…モ…ズ、…モ…ズ」のやうに、下に打消を伴つて并立的に述べた例である。

世尊の齊、厚(ク)シテ躡(ツカ)ミテモ不(ズ)ラズ、凸(ツツ)カにも(アラ)不(ズ) (弥勒上生経誓平安初期朱点)

諸の如來は……一法をも取(リ)たまは不(ズ)。取(リ)たまは不(ズ)を以ての故に、去りも無ク来りも無し。……是レをモチテ則法身は生もセ不(ズ)滅もセ不(ズ) (西大寺本金光明最勝王経卷第一平安初期白点、一五頁)

これと同じ本文を、後世の点本では次の如くモを伴はずに訓じてゐる。

世尊の齊、厚(ク)シテ躡(ツカ)マ不(ズ)、凸(ツツ)カネ (東大寺図書館藏弥勒上生経誓院政期点)

諸の如來は……一法をも取(リ)タマハ不(ズ)、取(リ)タマハ不(ズ)以(テ)の故(ニ)、去無ク来無し (石山寺本金光明最勝王経院政後期点)

但し金光明最勝王経でも永長点では「去も無ク来も無し」とモを伴つて居り、モを伴ふ例は後世皆無といふわけではないが、少いことは確であらう。

かやうに見て来ると、訓点では「も」の用法はあまり盛でないやうに考へられるのであるが、一方では、逆に訓点の方に却つて多く用ゐられる点も見出されるのである。

接続助詞の「とも」「ども」は、夫々「と」「ど」に「も」が添うたものと解せられ、その「も」は係助詞の「も」とは語源的に恐らく同一の語と考へるのであるが、逆接条件句を表はすのに「と」

の形は訓点では未だ管見に入らず、すべて「とも」と「も」を伴つた形であり、又「ど」も次に述べるやうに訓点では例が非常に少いやうであり、大抵は「も」を伴つて「ども」の形で用ゐられてゐるのである。一方、和文に於ては、「と」「とも」「ど」「ども」が併せ用ゐられてゐる(「と」の例は和文でも極めて少いが)が、「ど」と「ども」とを比べると、竹取・土左・古今などではあまり違はないが、物語や日記の類になると「ど」の方が「ども」よりも圧倒的に多くなつてゐる。(「ども」は和歌の中では比較的多く用ゐられるやうだが、ここではこれ以上は触れない。)

ども	ど	取竹
20	22	左土
16	23	今古
47	58	小計
83	103	勢伊
11	60	和大
15	72	枕
16	138	源氏
102	2,533	紫式部
1	56	日記
5	32	更級
8	68	和泉式部
8	43	讀典
166	3,002	侍小計
249	3,105	総計

一方、訓点資料では、例へば

ども	ど	興福寺藏大慈恩寺三藏法師伝 承德点・永久点	石山寺藏大唐西域記 長寛点・院政後期点
37	0		
29	5		

の如くであつて「ども」の方が圧倒的に多い。これらの中「ど」は「ども」の「も」を省記したかと疑はれるものもあるから、一層のことである。

概して、訓点では助詞「と」「ど」を用ゐることが少い。

其(一) 水瀕^{ハヤトケ}ク疾^{トケ}ケレド(其水瀕疾) (東大寺図書館蔵大般涅槃經卷第二院政後期点)

再三告示スレド終に命に從^{レタ}(ガハ)不(再三告示終不從命)

(石山寺藏大唐西域記卷第四長寛点。石山寺藏大唐西域記古点にはこれ以外にもトと訓まれる例が五つほどあるが、ヨコト点又は仮名「も」を省記したかと疑はれる節もあるから確例とは言へない)

かやうに「ドモ」の形は訓点では好んで用ゐられるやうだが、これと並んで、訓点では「だにも」「よりも」の如く副助詞に添へて用ゐることが多い。「だにも」「よりも」は和文にも見えるけれども、「だにも」が音便で「だんも」「だも」と転じたのは訓点特有の形とされてゐる。かやうに、訓点で「も」を他の助詞の下に附して好み用ゐるのは、文中に於てその上の助詞(ど・だに・より)によつて表はされる所の格を特に明確に呈示することが、目的であつたのではなからうか(この「目的」といふのは、必ずしも意識的なものか、それとも無意識的なものかは問はない)。このことは、訓読で目的格を表はすのに格助詞「を」を好み用ゐる——殊に上の述語へ返読する際には——ことなどとも共通する性格と見てよいのではないかと考へるのである。

八

以上、係助詞の各語について述べ來つたが、これらを総括した結論の如きものは必ずしもはつきりと打出すことは出来ないかも知れず、強ひて求めるならば、非常に抽象的な論となつてしまふけれど

も、訓読に於ては、係助詞の用法は全般的に和文よりも相当に制約されたものであり、しかもその制約の度合は、格助詞や副助詞に比べて、より甚だしいものと認めることが出来ようかと思ふ。しかし、一方、終助詞の類に比べると、係助詞の方がまだ和文との共通性が多いやうに考へられる。かやうな現象を如何に解釈すべきかと言ふに、未だ最終的な結論を述べる段階ではないと思ふが、一往の私案を提出するならば、大凡次の如きことが言へるのでないかと思ふ。即ち、訓読といふ作業は、原漢文に對した解説者が、それを理解受容し、更にそれを訓点といふ形で表現するといふ言語活動であるわけだが、この際、対象たる漢文は外国語であつて、相當に難解な文章であり、内容は宗教・思想・歴史・医術などが主であり、しかもそれを解説する人々は多く僧侶・学者階級であつて見れば、それを解説して更に表現した文の一部を殊に強調したり又自己の感動を表現したりする必要も少かつたらうし、又その余裕も少かつたことと思はれる。確に、仏教の經典の一部には、非常にdramaticな場面を含むものもあり、又訓読の対象となつた漢文の中には、文芸書も含まれてゐることであるから、そのやうなものについては係助詞による強調・感動などの表現が比較的多く表はれてゐるのであり、それは上述した如くである。又、平安初期・中期の頃は、平安後期・院政期に比較すると、係助詞の用法が(比較的ではあるが)少し緩やかな点もあるのに、それが後に至ると一層用法が窮屈になつて來る。この現象も、既に説かれて來た如く、平安初期には漢文にぢかに當つて漢文全体として直接に解説しようとした傾向が強かつたのに對して、平安後期以降は漢字に即した訓法が次第

に強まつて行つたという傾向が窺はれるのが、係助詞の消長もこの傾向の一つの表はれと見てよいのではないかと思ふ。

一体、係助詞の中でも、強調や感動を表はす「ぞ」「なむ」「こそ」、それに「は」「も」などは、それに対応する漢字は殆ど無いのである(ハといふ助詞に対応する「者」字などはあるが)。従つて、これらの係助詞は、訓読の際には、漢字の訓としてではなく、補読として表はされるものであり、しかもこれらの語が強意・感動等の意を表はすに止まり、実質的な意味を伴はないものであつて見れば、取意を旨とする訓読に在つては、補読をする必要性が比較的少かつたのであらう。又同じく補読で表はされる助詞でも、格関係を表示する格助詞や、又副助詞などと比べれば、訓読に於ける「必要度」が相当に低かつたと見ることが出来ようかと思はれるのである。

註(1) 宮坂和江「係結の表現価値―物語文章論より見たる―」国語と国文学昭二七・二。

飯倉篤義「歌物語の文章―「なむ」の係り結びをめぐる―」

国語国文昭二八・六

(2) 築島 裕「訓点語彙の一考察」国語学二七。

(3) 築島 裕「東大寺諷誦文稿」小考「国語国文昭二七・五。

(4) 春日政治「最研」下二九三頁他。

同 「古訓点の研究」一八四頁・二〇三頁・二七九頁他。

遠藤嘉基「訓点資料と訓点語の研究」二一〇頁。

春日和男「「也」「也」字の訓について―「ぞ」と「なり」との消

長―」国語国文昭三〇・二。

(5) 沢瀉久孝「「か」より「や」への推移」万葉の作品と時代所収。

(6) 春日博士は「平安中期一〇〇〇年後、院政時代以前の間におくべきではなからうか」とされる(「石山本最勝王経古点より」国語国文昭三三・一一)。

(7) 竹取―山田氏編索引。土左・伊勢・大和・枕―日本古典文学大系本。古今―西下・滝沢氏編索引。源氏―吉沢・木之下氏編索引。紫式部日記―中古文学研究会編索引。更級日記―東・塚原・前田氏編索引。和泉式部日記―文章語研究会編索引。讃岐典侍日記―馬淵氏編索引。

(8) 小林芳規「漢文訓読史上の一問題―再読字の成立について―」国語学一六。

同 「「らくのみ」「まくのみ」源流考」文学論藻八(昭三二・一〇)。

同 「「及」字の訓読」国文学言語と文芸昭三四・五。

(附記) 原稿が延引して編輯御当局に多大の御迷惑をおかけしましたことを深くお詫び致します。それにも拘らず福田良輔先生始め各位より非常な御厚意を忝う致しました。厚く御礼申し上げます。又小林芳規氏から種々有益な御助言を頂きましたことに感謝の意を表します。(三五・二・二)

―東京大学助教授―